

## 肺がん集検喀痰細胞診 D 判定の細胞像について

～標準的細胞との比較～

荒木由佳理<sup>1)</sup> 添田喜憲<sup>1)</sup> 千葉聖子<sup>1)</sup> 鈴木 哲<sup>1)</sup> 鈴木エリ奈<sup>2)</sup>

菅野 薫<sup>1)</sup> 藤森敬也<sup>3)</sup>

1)公益財団法人福島県保健衛生協会

2)公立大学法人福島県立医科大学医学部病理病態診断学講座

3)公立大学法人福島県立医科大学医学部産婦人科学講座

【目的】肺がん集検喀痰細胞診における当施設の D 判定は、肺癌学会集団検診の手引きに準じて行っている。今回、日本肺癌学会・日本臨床細胞学会の 2 学会合同委員会で提示している喀痰細胞診の判定区分別標準的細胞（以下標準的細胞）を基に、D 判定とした細胞像の検証を行った。

【対象】平成 12～26 年度の 15 年間に発見された原発性肺扁平上皮癌 79 例の中から、D 判定で臨床病期 0 期及び I 期であった 10 例（以下癌症例）と精密検査を行ったが異常がなく、その後 5 年間癌が発見されていない 12 例（以下癌未確定例）を対象とした。

【方法】①D 判定 22 例から高度異型扁平上皮細胞以上を抽出し、出現細胞数、細胞所見（細胞形状、細胞質染色性、細胞質辺縁、光輝性の有無）、核所見（核形状、クロマチン量等）を観察し、それらの細胞と標準的細胞を比較した。②癌症例と癌未確定例の細胞所見を比較検討した。2 群間の比較は、Mann-Whitney の U 検定を用い、p 値 0.05 未満をもって有意差ありとした。

【結果】①当施設で D 判定とした細胞は、細胞質イエローの大型不整形細胞や多角形細胞で核クロマチンは中等度増量がみられた。中型細胞は、類円形および多角形で、オレンジ好性で胞体に厚みがあり、多核を認めた。小型細胞は、ほとんどが類円形で、N/C 比大、核形不整、多核、核クロマチンは中等度の増量がみられ、標準的細胞と同様の所見であった。また、当施設ではライトグリーン核クロマチン増量した細胞が多数みられた。

②癌症例では標本 1 枚当たりの異型細胞の出現数が多かった。細胞質は両群の 80%以上がオレンジ好性で、イエローに染色される細胞は、癌症例で 16.2%、癌未確定例で 6.7%と癌症例で有意に多かった。

核形は、両群共に 70%以上が類円形を呈し、不整形な核が癌症例で 29%、癌未確定例で 19.1%と癌症例に有意に多くみられた。核クロマチン量は、中等度増量が両群共に 86%程度みとめ、高度クロマチン増量は癌症例でのみに 1.3%みられた。

【まとめ】当施設の D 判定では、全ての症例で D 判定の標準的細胞を捉えていた。このような所見を認めた場合は、標本を追加作製し、必ず精密検査を行うことが重要である。また、イエローで光輝性のある染色性、不整形核、核クロマチン高度増量の所見を認めた場合は、早期肺扁平上皮癌を念頭に置いて鏡検することが肝要である。